

英語複合名詞の語彙意味表示

加 藤 恭 子

0. はじめに

本稿では、英語の複合語の意味構造——中でも主要部と修飾部との意味関係——に注目し、それらを Pustejovsky (1995) の意味表示装置を用いて分析する。これによって、従来の分析とは異なる観点から、複合名詞の容認性・非容認性だけでなく、複合過程にかかる制約も説明することが可能になり、さらに、複合名詞の一種である句複合語の複雑性の成因を明らかにすることができる。まず、第1節では適切な複合語を構成する要素間の基底関係を明らかにした Downing (1977) と Levi (1978) の研究を概観し、第2節では、Pustejovsky (1995) で提案された語彙意味表示装置を複合名詞に適用し、その意味構造を分析する。第3節では、語彙意味表示装置が果たしてどの程度まで有効なのかを指摘する。

1. 複合名詞の構成要素間の基底関係

orange juice や *mailman* のように2つの名詞で構成される複合名詞では、その2つの構成要素の間にさまざまな意味関係が見られる。例えば、*orange juice* は *orange* を絞って作られる *juice* であるし、*mailman* は、*mail* を配達する人である。このような意味関係は一見したところ、無限のバラエティがあるように思える。そのため、Allen (1978) は、(1) の規則だけを設定し、具体的な意味解釈は個々の複合語にゆだねている。

(1) Allen (1978) の 'IS A condition'

X と Y の 2 つの名詞で構成された複合名詞 XY では、X は何らかの
意味で Y を修飾し、'XY is a kind of Y.' と解釈される。

このように、Allen (1978) の分析は、複合名詞の内部に見られる意味関係を個別に明示することを放棄したものと考えられる。

これに対して、多くの学者は、複合名詞内部の関係をいくつかのタイプに分類しようと試みてきた。その中で最も明示的な試みは、Levi (1978) である。

Levi (1978) の分析は、生成意味論 (generative semantics) の考え方に基づくもので、既存の複合名詞を構成する構成要素間の意味関係は、限られたタイプの意味述語によって表されると仮定し、基底にある関係節からその意味述語を削除していく操作を経て複合名詞が生成されると考えている。その限られたタイプの意味述語というのは、CAUSE, HAVE, MAKE, USE, BE, IN, FOR, FROM, ABOUT という 9 つで、彼女はこれらを Recoverably Deletable Predicate (=RDP) と呼んでいる。(2 a-i) には、この RDP と具体的な複合名詞との関係を示してある。

(2) a. CAUSE (*tear gas*)b. HAVE (*apple cake*)c. MAKE (*silkworm*)d. USE (*steam iron*)e. BE (*soldier ant*)f. IN (*field mouse*)g. FOR (*horse doctor*)h. FROM (*olive oil*)i. ABOUT (*tax law*)

(cf. Levi 1978: 76-77)

Downing (1977)では、新しく造語した複合名詞の解釈に関するいくつかの実験を基に、複合語の基底にある構成要素どうしの関係を調べ、いくつかの一般的な型(3 a-l)にまとめている。

- (4) i. ある複合語において、修飾名詞は主要部名詞をさらに特殊化する働きをする。従って、その構成要素どうしの間に、余剰性が生じる場合や、共起しそうにない無関係なもののどうしが結合しているよう

な場合、その表現は複合語であるとして認められない。

e.g. *fork-spoon, dinner-bath*

- ii. 修飾名詞と主要部名詞との間の複合関係は、永続的・習慣的、かつ予測可能なものでなくてはならない。つまり、慣習化され得るものでなくては複合語として認められない。

e.g. *counter-butter, pumpkin-bus*

Downing (1977) の研究は、数多くの新しい複合語の造語・解釈に関する実験結果に裏付けられた適切な複合関係や、複合語形成に関わるいくつかの制約を見出したという点では、注目すべきであるが、これらの定式化が不可能であると結論していることには再考の余地があるといえる。

次の節からは、Pustejovsky (1995) の枠組みでの語彙表示装置を利用することによって、これら 2 つの対照的なアプローチ法によって得られたそれぞれの複合関係のセットを一つに融合し、適切な複合関係に関してある程度の定式化をすることが可能であるということ、また、複合名詞の一種である句複合語の特殊性・複雑性も、同じ意味表示装置にその成因を求められるということを示していく。

2. 複合語の意味表示

本稿では、複合名詞を意味的観点から観察し、適切な複合語構造を考察していくことを目的としているが、その手段として、Pustejovsky (1995) で提案されていた語彙表示装置を利用することにする。次に示すのは、ある語彙項目や複合語の意味内容を表している名詞の語彙意味表示 (Lexical Semantic Representation (=LSR)) (cf. Busa & Johnston 1996) の基本スキーマである。

$$(5) \left[\begin{array}{l} \alpha \\ \text{ARGSTR} = [\text{other arguments in the qualia}] \\ \text{QUALIA} = \left[\begin{array}{l} \text{FORMAL} = \text{is a-relation} \\ \text{CONSTITUTIVE} = \text{parts of } \alpha \\ \text{TELIC} = \text{purpose of } \alpha \\ \text{AGENT} = \text{how is } \alpha \text{ brought about} \end{array} \right] \end{array} \right]$$

(Busa & Johnston 1996)

このモデルを仮定すると、名詞の store がその意味として持つ情報は、(5) のように記載されることになる。

$$(6) \left[\begin{array}{l} \text{store} \\ \text{ARGSTR} = \left[\begin{array}{l} \text{D-ARG 1} = [\text{y}] \text{ phyobj} \\ \text{D-ARG 2} = [\text{w}] \text{ human} \\ \text{D-ARG 3} = [\text{z}] \text{ human} \end{array} \right] \\ \text{QUALIA} = \left[\begin{array}{l} \text{FORMAL} = \text{building } ([\text{x}]) \\ \text{TELIC} = \text{sell_act } ([\text{e}^1], [\text{w}], [\text{y}]) \\ \text{AGENT} = \text{build_act } ([\text{e}^2], [\text{z}], [\text{x}]) \end{array} \right] \end{array} \right]$$

頂構造 (=ARGSTR) には、特質構造 (=QUALIA) に現れる全ての項がデフォルトの項 (=D-ARG) として示されている。(6) のモデルには、store は、‘a building or part of a building to sell various things’ のように定義されるという情報が、LSR における項構造と共に特質構造の中に encode されている。具体的に言えば、(6) の場合、項構造の D-ARG 3 と、特質構造の AGENT quale, FORMAL quale を見れば、‘store is the building built by human’ ということが理解できる。また、項構造の D-ARG 1, D-ARG 2 と、特質構造の TELIC quale を見れば、‘human sells the things in the building’

ということがわかる。これらの情報を総括することによって、**store** という概念が明らかになるわけである。

次に、これを複合語と句複合語に適用するとどうなるかを考えていく。

2. 1. 複合名詞の語彙意味表示

まず、前出の *store* を主要部とする複合語を考えてみた場合、すぐ思い付くのは、*drug store*, *candy store*, *health-food store* といった類のものであろう。これらの意味はそれぞれ *drug*, *candy*, *health-food* を売するための店という意味である。このタイプの複合名詞の意味関係は、Levi (1978) では (2 g) ('a store FOR selling things'), Downing (1977) では (3 k) の *Purpose* に分類されるものと考えられる。*candy store* を例にとって (5) の基本スキーマに当てはめると、次のようになる。

$$(7) \left[\begin{array}{l} \text{candy store} \\ \text{ARGSTR} = \left[\begin{array}{l} \text{D-ARG 1} = \boxed{y} \text{ candy} \\ \text{D-ARG 2} = \boxed{w} \text{ human} \\ \text{D-ARG 3} = \boxed{z} \text{ human} \end{array} \right] \\ \text{QUALIA} = \left[\begin{array}{l} \text{FORMAL} = \text{building } (\boxed{x}) \\ \text{TELIC} = \text{sell_act } (\boxed{e}, \boxed{w}, \boxed{y}) \\ \text{AGENT} = \text{build_act } (\boxed{e}, \boxed{z}, \boxed{x}) \end{array} \right] \end{array} \right]$$

この表示を見てわかるように、*candy store* というのは、'a building to sell candies' である。この情報は、TELIC quale では、**sell_act** という述語によって encode され、AGENT quale では、**build_act** によって encode されている。修飾名詞と主要部名詞との関係に注目すると、修飾名詞の *candy* が、主要部名詞 *store* に対してより具体化・特殊化する役割を果たしている。言い換えれば、*candy* の機能は、**sell_act** という述語に関係する項のうち第3項 (y) をより具体化しているということである。従って、(6) と (7) の LSR

を比べてみると、(7) では、その項を受けている D-ARG 1 に、**phyobj** に代わって **candy** が代入されている。つまり、(2 g) や (3 k) といった基底関係は、当該の複合語の LSR の TELIC quale によって説明される。

この意味表示システムを応用すれば、複合名詞における基底関係は、特質構造を形成する 4 つの qualia のうちの部分に深く関わっているかによって、ある程度定式化できそうである。(2) と (3) の表を借りて考察してみよう。

例えば、前出の *orange juice* は、Levi(1978)の考え方では、‘the juice which is made from orange’ となるから、(2) の表で言えば (2 g), Downing (1977) では、*orange juice* は、*orange* を絞って得られる *juice* だということで、(3 h) に分類される。この複合語を LSR を用いて表せば、(8) のようになる。

$$(8) \quad \left[\begin{array}{l} \text{orange juice} \\ \text{ARGSTR} = \left[\begin{array}{l} \text{D-ARG 1} = \boxed{\text{y}} \text{ orange} \\ \text{D-ARG 2} = \boxed{\text{w}} \text{ human} \end{array} \right] \\ \text{QUALIA} = \left[\begin{array}{l} \text{FORMAL} = \boxed{\text{x}} \text{ liquid} \\ \text{AGENT} = \text{squeeze_act}(\boxed{\text{e}}^1, \boxed{\text{w}}, \boxed{\text{y}}) \end{array} \right] \end{array} \right]$$

AGENTIVE quale に記述されている **squeeze_act** という行為を受ける対象となる物として、D-ARG 1 には、*squeeze* されるもの、すなわち修飾部の *orange* がリストされている。つまり、*orange juice* という複合語の基底にある意味関係は、AGENT quale によって表されている。

次に *mailman* について考えてみよう。*mailman* は、「*mail* を配達するための人。*mail* を配達することを仕事としている人」であるから、(2) の表では、(2 g) (=‘a man for delivering mail’), (3) では (3 l) の *occupation* に分類される。この LSR を示したのが (9) である。

- (9) $\left[\begin{array}{l} \text{mailman} \\ \text{ARGSTR} = \left[\begin{array}{l} \text{D-ARG 1} = \boxed{y} \text{ mail} \\ \text{D-ARG 2} = \boxed{w} \text{ human} \end{array} \right] \\ \text{QUALIA} = \left[\begin{array}{l} \text{FORMAL} = \boxed{w} \\ \text{TELIC} = \text{deliver_act} (\boxed{e}, \boxed{w}, \boxed{y}) \end{array} \right] \end{array} \right]$

この複合名詞語の修飾部 *mail* の役割は、主要部 *man* の LSR 内のは TELIC role に記述されてある **deliver_act** という述語の第2項を具現することである。つまり *mailman* という語を形成する構成要素間の意味関係は、TELIC role に反映されている。

紙面の関係上、個々の現象を一つ一つ取り上げて議論することは避けるが、他の意味関係に関しても同じように考えていけば、(2)と(3)は、共に、LSR という同一媒体を使うことによって、大体(10)(11)のようにまとめられそうである。(10)に示されているのは、Levi (1978)の提案した複合関係(cf., (2))と、特質構造を形成する qualia との関係。(11)に示されているのは、Downing (1977)の提案した複合関係(cf., (3))と qualia との関係をまとめたものである。表の中には、(8)(9)で考察したような事実をもとに、それぞれの該当箇所にマークが入っている。

(10)

	FORMAL	TELIC	AGENT
CAUSE (<i>tear gas</i>)			○
HAVE (<i>apple cake</i>)			○
FROM (<i>olive oil</i>)			○
MAKE (<i>silk worm</i>)		○	
USE (<i>steam iron</i>)		○	
FOR (<i>horse doctor</i>)		○	
IN (<i>field mouse</i>)	○		
BE (<i>soldier ant</i>)	○		
ABOUT (<i>tax law</i>)	○		

(11)

	FORMAL	CONST	TELIC	AGENT
Whole-part (<i>duck foot</i>)		○		
Part-whole (<i>pendulum clock</i>)		○		
Composition (<i>stone furniture</i>)		○		
Half-half (<i>giraffe-cow</i>)	○			
Comparison (<i>pumpkin bus</i>)	○			
Product (<i>honey glands</i>)			○	
Purpose (<i>hedge hatchet</i>)			○	
Occupation (<i>coffee man</i>)			○	
User (<i>flea wheelbarrow</i>)			○	
Source (<i>vulture shit</i>)				○
Place (<i>Eastern Oregon meal</i>)				○
Time (<i>summer dust</i>)				○

Downing (1977) は、複合可能な関係を限定することはできないとしているが、この表で、ほとんどの複合名詞の基底関係が、限られた4つの *qualia* で説明できることが予測される。

これまでの観察によって、従来頻繁に行われてきた *paraphrase* による複合語へのアプローチの是非に関係なく、LSR を利用することによって、適切な複合関係を扱う一つの方向性が見えてくる。

次に、同じ表示装置が、句複合語にも適用できるかどうかを確かめることにする。

2. 2. 句複合語の語彙意味表示

句複合語というのは、複合語の前要素として句という統語要素を含むもので、(12) のような例がそれに当たる。

(12) a. the Charles and Di syndrome

- b. a husband-and-wife quarrel
- c. a salad and soup supper
- d. a rag-and-bone man
- e. a cock-and-bull story
- f. a ready-to-wear store
- g. a black-and-white drawing
- h. a behind-the-scenes story
- i. an inside-the-park home run

句複合語は、形態的・統語的な特殊性から、一時的・偶発的な造語であるとして片付けられることがほとんどであった。実際、この種の表現は、informal な文体において見られることが多いのは事実である。しかし、句複合語は複合語の一種であるから、その意味構造も、これまで観察してきたような普通の一般的な複合語と同じシステムで説明されなければならない⁽¹⁾。

まず、(12 a) を例にとって考えてみよう。この主要部 *syndrome* の LSR は次のようになるだろう。

$$(13) \quad \left[\begin{array}{l} \textbf{syndrome} \\ \text{ARGSTR} = [\text{D-ARG 1} = \boxed{\text{w}} \text{ human} \cdot \text{thing}] \\ \text{QUALIA} = \left[\begin{array}{l} \text{FORMAL} = \text{phenomenon} (\boxed{\text{x}}) \\ \text{AGENT} = \text{cause} (\boxed{\text{e}}^1, \boxed{\text{w}}, \boxed{\text{x}}) \end{array} \right] \end{array} \right]$$

syndrome というのは、‘a phenomenon caused by someone or something’ と定義される。*Charles-and-Di* は、二人の人物名を表した名詞句である。それが *syndrome* と複合され、(13) の LSR の中の AGENT quale の第 2 項と D-ARG 1 にそのまま代入されることによって、‘a phenomenon caused by Charles-and-Di’ という解釈が正しく捉えられる。(12 b) の *husband-and-wife quarrel* も同様に考えられる。

- (14)
$$\left[\begin{array}{l} \text{quarrel} \\ \text{ARGSTR} = \left[\begin{array}{l} \text{D-ARG 1} = \boxed{x} \text{ animate_thing} \\ \text{D-ARG 2} = \boxed{y} \text{ animate_thing} \end{array} \right] \\ \text{QUALIA} = \left[\begin{array}{l} \text{FORMAL} = \text{event} (\boxed{e^1}) \\ \text{AGENT} = \text{quarrel_act} (\boxed{e^1}, \boxed{x} + \boxed{y}) \end{array} \right] \end{array} \right]$$

quarrel という event を引き起こすためには、主体者 (=x) と、相手 (=y) が必要となるが、その x と y の 2 つの項を *husband-and-wife* が具現していると言える。つまり、(12 a) (12 b) では、修飾部は主要部の LSR 内の AGENT quale に言及しているという具合に説明ができそうであるが、次の例はどうであろうか。

(7) のような一般の複合名詞と比較するために、やはり主要部に *store* を持つ *ready-to-wear store* で考えてみよう。この複合語と、(12 a) (12 b) との大きな違いは、第 1 要素が AP であるという点である⁽²⁾。

- (15)
$$\left[\begin{array}{l} \text{ready-to-wear store} \\ \text{ARGSTR} = \left[\begin{array}{l} \text{D-ARG 1} = \boxed{y} \text{ clothes} \\ \text{D-ARG 2} = \boxed{w} \text{ human} \\ \text{D-ARG 3} = \boxed{z} \text{ human} \end{array} \right] \\ \text{QUALIA} = \left[\begin{array}{l} \text{FORMAL} = \text{building} (\boxed{x}) \\ \text{TELIC} = \text{sell_act} (\boxed{e^1}, \boxed{w}, \boxed{y}) \\ \text{AGENT} = \text{build_act} (\boxed{e^2}, \boxed{z}, \boxed{x}) \end{array} \right] \end{array} \right]$$

(7) と比較すると明らかなように、*store* に *ready-to-wear* が付加されることによって新たに加えられた情報は、‘ready-to-wear store is a building to sell clothes’ という下線を引いた部分である。ここで注意したいのは、D-ARG 1 に代入されているのは、*ready-to-wear* ではなく、**clothes** だということである。そして、問題の修飾部は、TELIC role (**sell_act**) の述語の項とし

て機能するこの **clothes** を修飾する形で、主要部と関係付けられている。ここで当然生じる疑問は、なぜ '**clothes**' が出てくるのかということであるが、おそらく、*ready-to-wear* (特に *wear*) の意味構造から推定されるものと思われる。

同様に、修飾部が PP の *behind-the-scenes story* の場合を見てみよう。

(16) は、*story* の LSR である。

$$(16) \left[\begin{array}{l} \text{story} \\ \text{ARGSTR} = \left[\begin{array}{l} \text{D-ARG 1} = \boxed{\text{w}} \text{ human} \\ \text{D-ARG 2} = \boxed{\text{z}} \text{ human} \end{array} \right] \\ \text{QUALIA} = \left[\begin{array}{l} \text{FORMAL} = \text{story} (\boxed{\text{x}}) \\ \text{TELIC} = \text{hear_act} (\boxed{\text{e}^2}, \boxed{\text{w}}, \boxed{\text{x}}) \\ \text{AGENT} = \text{tell_act} (\boxed{\text{e}^2}, \boxed{\text{z}}, \boxed{\text{x}}) \end{array} \right] \end{array} \right]$$

この場合も、*behind-the-scenes* という形容詞が直接、項に代入されるのではない。注目したいのは、AGENT quale だが、この場合の修飾部 *behind-the-scenes* は、AGENT quale に encode されている述語とその項全体を修飾して、どこで **tell_act** という行為がなされるのかという観点から *story* の下位指定を行っている。

つまり、これら句複合語の修飾部の役目は、複合語形成によって、主要部の LSR に何らかの形で代入された項、もしくは述語を形容詞的あるいは副詞的に修飾するという二段構えの体制で主要部の修飾を行うということである。句複合語の第 1 要素には、直接代入の可能な NP だけではなく⁽³⁾、AP, PP, VP などが修飾部となっているものが数多く見られる。第 1 要素を主要部の LSR に直接代入することによって、解釈が可能になる一般の複合名詞に比べて、句複合語の持つ複雑さというのはこの点にあると推測することができる。

3. 語彙意味表示の有効範囲

3.1. 不適切な複合語の排除

これまでの観察によって、異なる方向からのアプローチによってある程度まとまりをもった複合関係のタイプが、さらに、一つの方向性に融合できるということと、同じ複合名詞であっても、句複合語の持つ特殊性というのが、LSRに反映されるということがわかった。

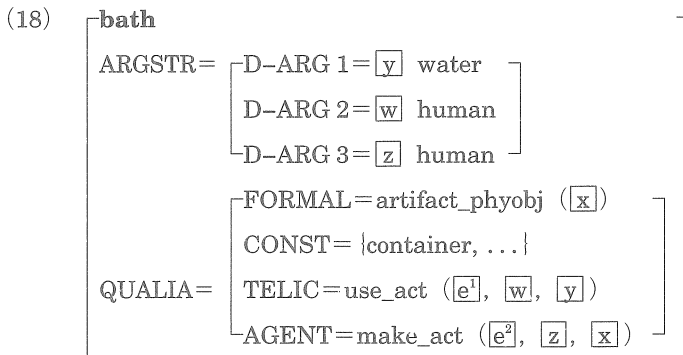
ここでは、Pustejovsky (1995) が主張するように、lexicon が豊富な生成機能を持っていることを前提としている。つまり、当該の意味表示装置が適切な複合語の説明を可能にするだけではなくて、不適切な複合語をどこまで排除できるかも当面の課題となる。

そこで、Downing (1977) が実験結果から引き出してきた、複合語としては不適切な表現を考えてみよう。例えば、*fork-spoon* というのは、それぞれの機能的な面を重視して造語された表現であるが、これは先に挙げた制約のうち (4i) の違反であり、実験の結果、適切な複合語であると認められなかった。この表現を例にとって LSR を用いて考察してみる。(17) に挙げてあるのは、主要部名詞 *spoon* の LSR である。

(17)	<div> <div>spoon</div> <div> <div>ARGSTR=</div> <div> <div>D-ARG 1=[y] food</div> <div>D-ARG 2=[w] human</div> <div>D-ARG 3=[z] human</div> </div> </div> <div> <div>QUALIA=</div> <div> <div>FORMAL=artifact_tool ([x])</div> <div>CONST={handle, shallow bowl, ...}</div> <div>TELIC=eat_act ([e¹], [w], [y])</div> <div>AGENT=make_act ([e²], [z], [x])</div> </div> </div> </div>
------	---

「機能」に着目すると, *fork* も *spoon* も, ‘a tool with which you eat food’ である。(17) と同様に *fork* の LSR を作ってみたとき, 表示の変更が必要なもののといえば, その構成部分 (CONSTITUTIVE quale) に encode される内容だけである。従って, もしこの複合が強行された場合, *fork* は *spoon* と同じく FORMAL quale の **artifact_tool** という述語によって encode されている項 (=x) に代入され, もちろん TELIC quale にも AGENT quale にも関係付けられなければならないことになる。同一の項を 2 つの entity がそれぞれ指定するということは, 文字どおり余剰的である。ちなみに, 複合ではなく混成 (blending) という語形成の手法を用いれば, *spork* という語が可能である。

では, *dinner-bath* ではどうであろうか。(18) はこの表現の LSR である。



主要部 *bath* の LSR に対して, *dinner* というのはどういう役割をしているかを考えた場合, これに関係付けられそうな項はどの quale にもない。そのため, この表現は複合語として認められない。

このように, LSR を用いた表示法は, 不適切な複合関係から成る複合語を排除する際にも有効である。句複合語に関しても (4i) の制約を破るような例は現在のところみつからない。

従って、(17) と (18) で例示したように、LSR は、構成要素間に、余剰性が生じる場合や、共起しそうな無関係なもののどうしが結合しているようなもの、つまり、修飾部が全体の複合語を意味的に下位範疇化できないような表現が、複合語として認められない理由もうまく説明できる。

3. 2. 語彙意味表示による予測性の限界

問題は、制約 (4 ii) である。この制約は簡単に言えば、ある表現が慣習化され得るか否かということである。少なくとも慣習化される可能性を持つ場合は複合語として成立しやすいということなのだが、これを LSR はどこまで説明できるのだろうか。

まず、次の (19 b) と (21 b) の表現はどちらも、対応する英語の句複合語 (cf., (12 a) (12 b)) を参考にして造った造語である。前者は複合語として認められるが、後者は適切な複合語であるとは認められない。主要部を同じくする句複合語と照らし合わせながら、それぞれの対比を考えてみよう。

(19) a. a husband-and-wife quarrel

b. a brother-and-sister quarrel

(20)
$$\left[\begin{array}{l} \text{quarrel} \\ \text{ARGSTR} = \left[\begin{array}{l} \text{D-ARG 1} = \boxed{x} \text{ animate_thing} \\ \text{D-ARG 2} = \boxed{y} \text{ animate_thing} \end{array} \right] \\ \text{QUALIA} = \left[\begin{array}{l} \text{FORMAL} = \text{event } (\boxed{e^1}) \\ \text{AGENT} = \text{quarrel_act } (\boxed{e^1}, \boxed{x} + \boxed{y}) \end{array} \right] \end{array} \right]$$

(19 a) と (19 b) に共通する主要部 *quarrel* の LSR が (20) に示してある。*quarrel* という event を起こすためには、主体者 (=x) と、相手 (=y) が必要となるが、その x と y の 2 つの項を (19 a) と (19 b) それぞれの修飾部 *husband-and-wife* と *brother-and-sister* が限定していると言える。

つまり、修飾部は主要部の LSR 内の AGENT quale に言及している。ところが、次の例はどうであろうか。

- (21) a. a Charles and Di syndrome
 b. ?a Harry and Betty syndrome (Jackendoff 1997)

(21 a) と (21 b) に共通する主要部名詞 *syndrome* の LSR は大体次のようになる。

- (22)
$$\left[\begin{array}{l} \text{syndrome} \\ \text{ARGSTR} = [\text{D-ARG 1} = \boxed{w} \text{ human} \cdot \text{thing}] \\ \text{QUALIA} = \left[\begin{array}{l} \text{FORMAL} = \text{phenomenon} (\boxed{x}) \\ \text{AGENT} = \text{cause} (\boxed{e^1}, \boxed{w}, \boxed{x}) \end{array} \right] \end{array} \right]$$

syndrome というのは、‘a phenomenon caused by someone or something’ と定義される。しかし、一見したところ、*Charles-and-Di* も、*Harry-and-Betty* も同じ性質を持つ語彙形式（この場合は、両方とも人の名前）であり、主要部の LSR の中の AGENT quale の第 2 項（=w）を指定するという同じ機能を持つもののように思える。しかし、(21 a) は複合語だが、(21 b) の方は複合語であるとは認められない。(21 b) のような例は、LSR だけでは、このような事実を表示できないことを示している。

4. 結 論

本稿では、Levi (1978) や、Downing (1977) で提唱されていた、複合名詞の根底にある適切な複合関係を、一つのより高度な表示システムを用いることによって定式化した。また、Downing (1977) によって指摘された複合の際に課せられる制約の一部 (4 i) に関しても、適切な複合名詞となれる構成

要素間の一番ふさわしい関係を決定する能力を持つ、同じ意味表示システムで説明できる可能性があるということを示した。

また、特殊表現であるとされてきた句複合語の扱いに関しても、LSR は、重要なヒントを提供している。句複合語の複合関係は複合名詞の一種といえるものであるが、LSR への表示法と解釈には一般的な複合名詞とは異なる難解さを伴う。句複合語の持つ複雑性というのは、他でもないこの点にあると考えられる。

しかし、意味表示装置だけでは不十分なことは明らかである。複合語の持つ「名付け機能」(cf., Downing (1977), 影山 (1993)) には欠かせない条件である「慣習化」の問題に関しては、Downing (1977) が指摘しているように、語用論的な領域への介入が必要になってくる。

注

- (1) Bresnan and Mchombo (1995) における lexical integrity のテストは、類似する英語の複合形と名詞句との区別をする重要な基準として働く。Kato (1998) と、Kato and Kageyama (1998) では、このテストを従来句複合語として分類されていた表現に適用して、真の複合語とそうでないものを明確に区別している。

なお、当然のことながら、本稿で句複合語であるとしているものは、全てこのテストの結果によっても 複合語であることを証明されたものである。

- (2) 句複合語の第一要素の範疇についてはここでは詳しく触れていないが、本稿では、あくまで複合は lexicon で行われる操作であると想定しているため、厳密に言えば、例えばここで AP としている表現 (*ready-to-wear*) は、もともとは AP であっても、句複合が行われる際に、再分析 (reanalysis) のような操作を経て形容詞という語彙範疇になっていると考えられる。
- (3) たとえ、前要素が NP の場合であっても、*cock-and-bull story* や、*rag-and-bone man* のように、前要素をそのまま代入することが不可能な句複合語もある。

参 照 文 献

- Allen, Margaret. 1978. *Morphological investigation*. Doctoral dissertation, University of Connecticut.
- Bresnan, Joan and Sam A. Mchombo. 1995. The lexical integrity principle:

- Evidence from Bantu. *Natural Language & Linguistic Theory* 13: 181–229.
- Busa, Federica. 1996. *Compositionality and the semantics of nominals*. Doctoral dissertation. Brandeis University.
- Busa, Federica, and Michael Johnston. 1996. Cross-linguistic semantics for complex nominals in the generative lexicon. in *Proceedings of the AISB 96 Workshop: Multilinguality in the lexicon*, Brighton.
- Downing, Pamela. 1977. On the creation and use of English compound nouns. *Language* 53 (4): 810–842
- Jackendoff, Ray. 1997. *The architecture of the language faculty*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- 影山太郎. 1995. 「文と単語」『日本語学』14: 5, 12–20. 明治書院
- 影山太郎. 1997. 「単語と辞書」(『言語の科学』第3巻) 岩波書店
- Kato, Kyoko. 1998. A semantic approach to the phrasal compounds in English. Master's thesis. Kwansei Gakuin University.
- Kato, Kyoko, and Taro Kageyama. 1998. Phrasal compounds and lexical integrity. *English Linguistic* 16: 309–315
- Levi, Judith N. 1978. *The syntax and semantics of complex nominals*. New York. Academic Press.